

27

社内報

夏絆

—なつな—

2026.1.28発行

＼漢字一文字で表す／

2026年の抱負！

新しい年を迎えるにあたり、社員の皆様に「2026年の目標や抱負を込めた漢字一文字」を伺いました。
職人一人ひとりの熱い想いと、未来への強い決意が詰まった一文字をご紹介します！

改

なつ はら そう すけ
夏原 崇介社長

新しく迎える番頭さんと協力し、改めて改善・改良に努めます。ゆくゆくは、夏原株式会社を成長させることができが目標です。

2026年への意気込み

2026年は現場管理のメンバーをガラッと一新します！また新しい夏原株式会社へ変化するのではないかと期待を寄せています。

昇

たか はし ただし
京都高建株式会社 高橋 正社長

2025年の経験を土台に、2026年はさらなる「昇」を目指します。個々がレベルアップしてチーム全体の力が向上し、前へと進む1年をつくりましょう。変化をチャンスと捉え、着実に成果へつなげます。

2026年への意気込み

2025年は、何事もなく安定した日々を送ったことに感謝です。2026年は上昇を目指し、結果を伴う動きを目指します。

飛

やま ざき じゅんぺい
山崎 順平さん

2025年は初めて現場の職長を経験したり、1級技能士に合格したりとステップアップした一年でした。2026年は入社3年目に入るために、これまでの経験を活かして飛躍の年にしたいと思います。

2026年への意気込み

2025年は怪我もなく、無事に1年を過ごせて良かったと思います。また、若手を連れて仕事をしながら教える難しさを知るなど、良い経験ができた一年でした。2026年は自分のさらなるステップアップはもちろん、当社の若手に経験をもっと伝えてレベルアップしてもらうことも目標です！

続

なか みち つかさ
中道 師さん

継続することが目標です。続けることで会社やお客様からの信頼につなげます。毎日、毎月コツコツと頑張ります。

2026年への意気込み

2025年は大きな事故もなく終わることができました。2026年も安全第一で頑張り、作業員みんなにとって良い1年になれば嬉しく思います。

貢

なか むら きょう へい
中村 恭兵さん

今まで以上に責任感を持たなければという思いから、責任の「責」という漢字を選びました。仕事では現場を任せられ、2026年は今まで以上に引き締めて何事にも取り組んでまいります。プライベートでは、2025年に家を建て、2人目の子どもが産まれました。家庭でも仕事でも頼られる存在を目指します。2026年はそのような目標に一步でも近づけるように頑張っていきたいと思います。

2026年への意気込み

2025年は良い意味で様々なことがありました。変化に伴って責任感を持ち、より一層気を引き締めて、2026年も良い年になるように頑張ります。

渠

なか むら しげ はる
中村 重治さん

何事にも楽しんで取り組むことが目標です。

2026年への意気込み

KIHも終わり、2026年は少しゆっくりのんびりと進められたらと思います。

渠

ほそ かわ とも じ
細川 智司さん

私が職長をしている現場を、皆が楽しく笑顔で働ける環境にすることが目標です。職人さん一人ひとりが満足できる現場を目指し、自分自身も満足できるように頑張ります。

2026年への意気込み

怪我をすることなく、危険なことはお互いに指摘し合い、安全に作業したいと思います。

力

にし うら まさ き
西浦 雅季さん

互いに協力し、自分の現場だけでなく周囲の忙しい現場を助け合います。職長同士のコミュニケーションもとり、皆で人の動かし方を考えていきましょう。

2026年への意気込み

2025年は自分の現場で仲間が怪我をしてしまいました。2026年は自分の担当する現場や夏原の現場で、怪我をする人が必ずゼロになるように頑張りましょう。

安

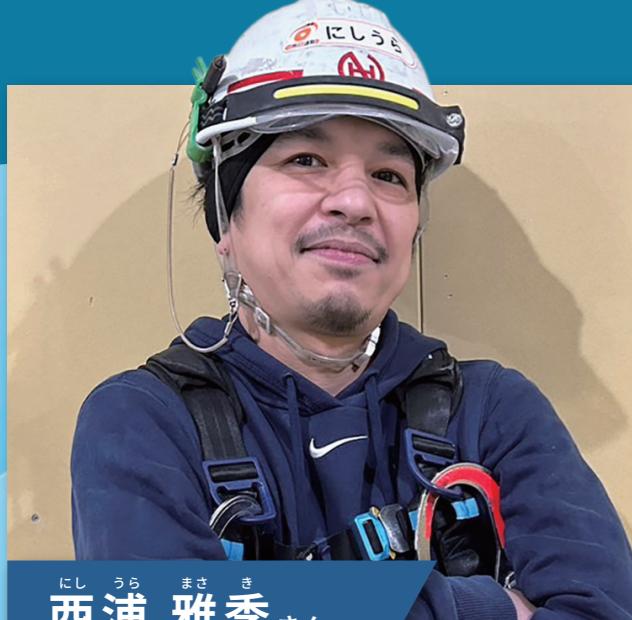
なが さわ ひろし
長沢 洋さん

私が選んだのは、安全第一の「安」。ちょうど1年前に車で交通事故を起こしました。仕事を約2か月間休み、たくさんの方にご迷惑をおかけすることになりました。2026年はそのようなことが起こらないように、より一層安全には気をつけます。

2026年への意気込み

2025年は新しい家族も増え、より一層頑張らないといけないと痛感しました。そのためにも、仕事もプライベートも無事故、無災害、何事にも安全第一に取り組んでいきます！

現場の信念とDX活用で築く 「災害ゼロ」の現場



西浦 雅季さん

安全意識の重要性

「怪我だけは絶対に させない」という信念で

万が一怪我をしてしまえば、本人が痛みや苦しみを味わうことはもちろん、現場の作業も止まり、会社全体にも大きな迷惑がかかります。そのため、作業を始める前には必ず危険な箇所がないかを確認し、安全に作業ができる状態になってから指示を出すように徹底しています。

作業中も、職人さんの様子を見回ることを欠かしません。狭い現場で無理な体勢で作業をしていないか、道具の使い方が間違っていないか、物が落ちてくる危険性はないか。一人ひとりの動きに目を配り、少しでも危ないと感じたらすぐに声をかけて作業を止めるようにしています。

過去の失敗経験 忘れない事故の教訓

現在の現場であるバッテリー工場の内装工事において、職人さんが怪我をする事故がありました。私の目が届かない場所での出来事でしたが、鉄製の定規が落下し、手の甲に当たってしまったのです。その際、作業員が手袋を

着用していなかったことが、負傷の原因でした。「怪我をさせない」と強く思っていたにもかかわらず起きましたこの事故。私にとっては非常にショックな出来事であり、職長として深く反省しました。一瞬の油断や、道具の置き場所1つで事故は起きてしまいます。この経験から、手袋の着用を「絶対」のルールとして徹底させています。

事故を防ぐ日々のルーティン

道具と環境には 細心の注意を払う

事故防止の一環として、作業員個々の装備や工具の取り扱いについて厳格な確認を行っています。とりわけ安全手袋や安全靴の着用は、安全管理の基本として徹底させています。また現在の現場においては、高さ約7mの壁面作業で「高所作業車」を使用するため、適正な操作手順の遵守を重点的に指導。自身の安全管理はもとより、同僚の工具管理や使用状況に不安全な点がないか、常に周囲に目を配ることが私の責務であると考えています。

現場で大切にしていること

チーム全体で高める 安全意識

経験の浅い若手や実習生と働く際は、特に丁寧な指導を心がけています。初めて使う道具などは、誤った使い方が大きな事故につながるため、正しい使用方法を根気強く教えます。加えて重視していることは、現場での「KY(危険予知)活動」です。朝の作業前や昼の休憩後に全員で集まり、その日の危険箇所や他業者からの連絡事項などを共有します。私が一方的に指示するだけでなく、作業員同士が互いの安全を確認し、気づいたことがあれば遠慮なく声をかけ合う。そういう「全員で安全を守る風土」を、これからも現場に根付かせていくたいと考えています。

現場での事故を未然に防ぐため、私たちは日々どのような意識を持つべきでしょうか。現場の最前線で安全を守り抜く西浦さんと、組織全体を俯瞰し安全品質の向上に取り組む大路さんに、それぞれの視点から「安全」への想いを語っていただきました。

安全管理における現状と課題

現場ごとに異なる 「安全」の最適解

安全品質管理部の責任者として現場を見ていますが、一言で「安全管理の状況」を評価することは非常に困難だと考えています。私たちが手がける現場は、都心の高層ビル建設から地方の小規模店舗まで多岐にわたり、それぞれ求められる管理の質や環境が全く異なるからです。例えば、厳格な入場管理が必要な現場もあれば、監督者が常駐しない現場もあります。これら全てに画一的なルールを適用するのは現実的ではありません。高い基準を一律に求めすぎると、現場が回らなくなる恐れもあるからです。しかし、安全は第一優先事項です。現場ごとの特性を理解し、それぞの環境で最適な安全管理を模索し続けること。その統一の難しさと常に向き合っています。

管理者視点の事故防止策

「凡事徹底」が信用の礎となる

現場での「ちょっとした手抜き」や「油断」は、会社全体の信用失墜に直結します。最も危惧するのは、「誰にでもできる改善」がなされないことです。例えば「右よし、左よし」という指差呼称。誰にでもできる基本動作ですが、これが徹底されていないと、万が一の際やお客様の目に触れたときに「管理が行き届いていない」と判断されてしまいます。当たり前のことを実践して初めて信頼が得られます。しかし人は忘れてしまう生き物です。だからこそ私は、現場で同じことを繰り返し伝えています。相手が面倒だと感じても、耳にタコができるくらい何度も言い続けること。それが、管理側ができる未然防止の努力だと考えています。

会社で取り組むDX施策

DX化で目指す情報の即時共有

現在、会社として取り組んでいるのが、iPadなどを活用した情報の共有です。これまで紙の図面でやり取りをしていましたが、汚れや

安全品質管理部
課長 大路 洋平さん

情報の更新漏れといった課題がありました。アプリなどを通じて最新情報を全員がリアルタイムで共有できれば、施工の間違いや手戻りを防げます。また、施工後の自主検査においても、複数の目でデータを確認できるため、精度の向上につながります。情報共有のスピードと正確さを高めるこのDX化を、今後はさらに定着させ、安全施策の1つとして根付かせていきたいと考えています。

社員の皆さんへ

職人は最前線の 「営業担当」

全社員、特に職人の皆さんに伝えたいのは、「職人こそが最前線の営業担当である」ということです。お客様が「またこの会社に仕事を頼みたい」と思うかどうかは、現場での職人の仕事ぶりにかかっています。指差呼称などを大げさで些細なことだと感じることもあるかもしれません、そのような小さなことへの真摯な姿勢こそが、お客様に「誠実な会社だ」という印象を与えます。プロフェッショナルとしての振る舞いは、会社の評価を高め、次の仕事につながり、結果として皆さん自身に還元されます。安全への高い意識が、会社と自分自身の未来を守ることにつながると信じています。これからもよろしくお願ひいたします。